

博士論文

敦煌文献における学士郎題識の研究

(要約)

令和6年9月

広島大学大学院総合科学研究科

総合科学専攻

玉素甫 艾沙

目次

| | |
|----------|---|
| 凡例 | 1 |
|----------|---|

緒論

『敦煌文献における学士郎題識の研究』 解題

| | |
|--------------|---|
| 一、研究背景 | 3 |
| 二、研究方法 | 4 |
| 三、研究構成 | 6 |
| 四、研究意義 | 7 |

第一章 学士郎の題識

| | |
|--|----|
| 第一節 敦煌文献題識整理回顧 | 9 |
| 一、主要蔵地整理 | 9 |
| 二、散蔵整理 | 14 |
| 三、專題整理 | 16 |
| 小結 | 18 |
| 第二節 敦煌文献題識研究回顧 | 19 |
| 一、総合研究 | 19 |
| 二、単篇研究 | 20 |
| 三、專題研究 | 22 |
| 小結 | 23 |
| 第三節 学士郎題識集録 | 24 |
| 一、題識という用語の問題点 | 25 |
| 表 1、『遼真贊』題記用語一覧 | 26 |
| 図 1、Ch. lvii. 004『米延徳等施絵観音菩薩像』題識 | 28 |
| 二、学士郎題識の概況 | 28 |
| 表 2、敦煌文献「学士郎」呼称題識一覧 | 30 |
| 表 3、敦煌文献「学郎」呼称題識一覧 | 33 |
| 表 4、敦煌文献「学生」呼称題識一覧 | 35 |
| 表 5、敦煌文献「学士」呼称題識一覧 | 36 |
| 表 6、関連呼称題識一覧 | 37 |

第二章 学士郎の身分

| | |
|---------------------------------------|----|
| 第一節 題識内容「呼称」の時代性とその背景 | 40 |
| 一、学生呼称の時代性 | 40 |
| 図 2、P. 2643『古文尚書卷五』題識 | 40 |
| 二、学士呼称の時代性 | 43 |
| 図 3、P. 2681『論語卷第一』題識 | 43 |
| 図 4、P. 2618『論語卷第一』尾題（左）及卷背題識（右） | 44 |

| | |
|-------------------------------|----|
| 三、学郎及び学士郎呼称の時代性 | 45 |
| 図 5、P. 3906『雑抄字宝碎金一卷』題識 | 46 |
| 小結 | 48 |
| 第二節 学士郎の氏族属性と帰義軍社会結構の諸相 | 48 |
| 一、学士郎の氏族属性と変化 | 49 |
| 表 7、各呼称姓氏人数一覧 | 51 |
| 図 6、P. 3197V 姓氏詩文題識 | 57 |
| 二、学士郎の宗教属性と一因 | 58 |
| 図 7、S. 5803『僧統謝太保文範』題識 | 61 |
| 図 8、P. 3721V『冬至日自断官員』題識 | 62 |
| 小結 | 63 |

第三章 学士郎の行為

| | |
|---|----|
| 第一節 題識内容「読」と「誦」の考察 | 65 |
| 一、読誦の意義 | 65 |
| 二、読誦の練習——三件『誦経歴』を中心に | 67 |
| 図 9、S. 8674『僧人誦経遍教名録』(左)、P. 3092『受八関齋戒文』卷背「誦経記録」(右) | 69 |
| 1. P. 3092V テキスト分析 | 69 |
| 表 8、P. 3092V 読誦進度一覧 | 70 |
| 図 10、S. 371『浄土寺試部帖』 | 72 |
| 図 11、S. 11461b『新戒僧円喜日誦観音経記』 | 72 |
| 2. S. 11461b テキスト分析 | 73 |
| 表 9、S. 11461b 読誦進度一覧 | 73 |
| 3. BD13683 テキスト分析 | 75 |
| 表 10、BD13683 読誦進度一覧 | 75 |
| 三、読誦の応用 | 76 |
| 1. 題識にみる読誦の使用表現 | 77 |
| 表 11、学士郎題識「読」「誦」用語一覧 | 77 |
| 2. 題識にみる読誦の関連行為 | 79 |
| 1) 居 | 79 |
| 2) 念 | 80 |
| 3) 札 | 81 |
| 4) 聴 | 83 |
| 小結 | 85 |
| 第二節 題識内容「書」と「写」の考察 | 85 |
| 一、側書論争の問題点 | 86 |
| 図 12、P. 3189『開蒙要訓一卷』題識録文 | 86 |
| 二、題識にみる「書」「写」の使用 | 88 |
| 図 13、P. 2825『太公家教一卷』題識(左)、S. 705『開蒙要訓一卷』題識(右) | 90 |
| 図 14、S. 2614『大目捷連冥間救母変文』題識(左)、P. 2054 十二時普勸四眾依教修行』題識(右) | 90 |
| 図 15、P. 3322『卜筮書』題識(左)、P. 2716『論語卷第七』題識(右) | 91 |
| 三、題識にみる書の実用性意義 | 92 |
| 図 16、P. 3649『雑抄一卷』題識(左1、2)、P. 3913『金剛峻経等』題識(右2)、P. 3738『李嶠雜詠』題識(右1) | 92 |

| | |
|--|-----|
| 図 17、P. 2054 卷背題識（左）、P. 2133 卷背題識（中）、S. 2894 卷背題識（右） | 93 |
| 図 18、北方神星図（左）、熾盛光仏並五星図（中）、目連守孝図（右） | 95 |
| 小結 | 96 |
| 第三節 敦煌文献習字テキスト共通性の考察 | 96 |
| 一、筆勢の概念とその書写行為 | 97 |
| 1. 筆勢の要点 | 97 |
| 2. 筆勢の構成 | 99 |
| 表 12、「永字八法」内容と字例一覧 | 99 |
| 表 13、「五勢及異勢」内容と字例一覧 | 101 |
| 二、筆勢の習得にみる習字テキスト--『上大夫』『牛羊千口』を例として | 104 |
| 1. 『上大夫』にみる筆勢の基礎練習 | 105 |
| 図 19、P. 4900 (2)『上大夫丘乙己習字』 | 105 |
| 表 14-1、『上大夫』筆勢一覧 | 105 |
| 表 14-2、『上大夫』筆勢（異本）一覧 | 108 |
| 2. 『牛羊千口』にみる筆勢の補充練習 | 109 |
| 図 20、BD10048『習字雑写』残片 | 110 |
| 表 15、『牛羊千口』筆勢一覧 | 110 |
| 図 21、S. 5513『開蒙要訓摘抄』題識 | 111 |
| 図 22、P. 3145V『習字』題識、P. 3896V『積奠文・鳥鳴占卜書（藏文）』題識 | 112 |
| 三、筆勢の応用にみる題識の諸形態と成因 | 113 |
| 1. 「緩筆定其形勢」と「一字数行」題識の成因 | 113 |
| 図 23、P. 3114『練字雑写（千字文）』 | 114 |
| 図 24、P. t. 139V『尚想黃琦習字』 | 115 |
| 図 25、P. 2712V『墨跡』 | 115 |
| 2. 「臨写」及び「雑写」題識形態の再認識 | 116 |
| 図 26、BD08639V『習字雑写（本際経）』 | 117 |
| 図 27、P. 2483V『雑写』 | 117 |
| 図 28、BD09089V『雑写』 | 118 |
| 図 29、P. 3393『雑抄』（左）、P. 3738V『雑写』 | 119 |
| 小結 | 120 |

第四章 学士郎の役割

| | |
|---|-----|
| 第一節 題識内容「所属」と学官兼称現象の考察 | 121 |
| 一、帰義軍官制の構造と変化 | 121 |
| 図 30、張承奉時期（900年頃）の帰義軍組織簡図 | 122 |
| 二、学士郎題識にみられる諸職官 | 123 |
| 1. 押衙の一考察 | 123 |
| 図 31、P. 2841『小乘三科』卷背題識と録文 | 125 |
| 図 32、P. 2566V『礼仏懺滅寂記』、P. 2566V 題識「滅罰」 | 126 |
| 2. 判官の一考察 | 126 |
| 3. 孔目の一考察 | 128 |
| 三、題識にみる学士郎の進路 | 129 |
| 1. 都頭と官府 | 129 |
| 2. 参謀と伎術院 | 131 |

| | |
|--|-----|
| 3. 社官と社司 | 132 |
| 小結 | 134 |
| 第二節 応用文書の「連結と転換」-- 『難月文』の考察を例として | 134 |
| 一、テキストの連結 | 135 |
| 1. 難月文内容の関連 | 135 |
| 表 16、『難月文』内容分類一覧 | 135 |
| 2. 難月文結構の関係 | 140 |
| 表 17、『難月文』結構分類一覧 | 141 |
| 二、テキストの転換 | 143 |
| 1. 主題転換 慶誕子文と満月文の延伸 | 143 |
| 表 18、『慶誕子文』内容一覧 | 144 |
| 表 19、『満月文』内容一覧 | 145 |
| 2. 形式転換 絵観音菩薩功德記の応用 | 147 |
| 図 33、『水月観音菩薩像』下部供養人像及題識 | 147 |
| 表 20、『絵観音菩薩功德記』結構一覧 | 148 |
| 小結 | 149 |
| 図 34、莫高窟 103 窟南壁『念経治病』図 | 149 |

終章

学士郎題識研究の展開

| | |
|------------------|-----|
| 一、文献整理上の課題 | 151 |
| 二、題識研究上の課題 | 152 |
| 三、結語 | 154 |

付録

『敦煌文献学士郎題識集録』

| | |
|--------------|-----|
| 索引 | 157 |
| 一、學生 | 163 |
| 二、學士 | 195 |
| 三、學郎 | 211 |
| 四、學士郎 | 246 |
| 五、関連呼称 | 290 |

参考文献

| | |
|----------------------|-----|
| 一、和文（五十音順） | 301 |
| 二、中文（年代順） | 302 |
| 三、欧文（アルファベット順） | 312 |

| | |
|----------|-----|
| 謝辞 | 313 |
|----------|-----|

博士論文の要約

前世紀初頭の敦煌文献の発見により、「敦煌学」という学問分野が形成され、資料の整理・研究作業が開始された。草創期以降、敦煌学研究は常に資料整理を中心に展開されてきたが、文献整理が進展すると、次第に文献そのものの内容研究から地域社会文化への研究へと範囲が広がり、活発に行われるようになった。このような新たな研究背景のもと、本研究では敦煌文献に記された「題識」に焦点を当て、整理作業に基づき、伝世文献には見られない「学士郎」という存在を中心に、その活動の実態や社会的立場などを考察する。

本研究の第一章から第四章、および付録は以下のように要約する。

第一章「学士郎の題識」では、敦煌文献の題識整理に関する学術史を検討し、付録の『敦煌文献学士郎題識集録』を含まれ、基礎的な作業および研究を行う。第一節と第二節において、学術史の回顧を通じて、題識資料が整理から研究へと発展し、さらに専門的な展開が進んできた過程を明らかにする。ここでは、先行研究が題識資料に注目しているものの、用語や定義、範囲において定説が確立しておらず、異なる術語が使用されている問題を指摘する。第三節の第一部では、先行研究で用いられてきた用語に基づき、『邈真贊』文書の整理を通して、頻繁に使用される「題記」という用語が、実際には「擬題」として用いられている場合が多く、特に絹画においては文字テキストの転写行為を指していることを解明する。「題識」という用語は、さらに標識としての意味を含み、写本や造像、絵画などに付された様々な記載を包括できるため、本研究においてより適切な用語として定義されるべきであるとする。第二部では、付録として整理された題識について、文献の情報、人物名、呼称、紀年、所属などを簡潔に説明し、一覧表として整理する。

第二章「学士郎の身分」では、題識資料に記載された「紀年」、「呼称」、「姓名」などの「身分」に関連する情報から、官学が廃止された吐蕃統治時期や「学士郎」が主流となった曹氏帰義軍の後期であっても、「学生」という呼称が使用され続けていたことが確認された。一方で、「学士郎」の呼称は、「学士」、「学郎」とともに張氏帰義軍時代に現れ、曹氏帰義軍時代に主要な呼称となり、顕著な時代的特徴を示す。これは、「学士郎」と「学生」が区別されるだけでなく、「学士郎」および関連する呼称が帰義軍政権と密接な関連を持っていることを示唆している。したがって、第一節では、題識の整理結果に基づき、「学士郎」および関連する呼称の出現と適用の時代背景を調査・分析し、張氏、曹氏帰義軍時代の各呼称の適用特徴について議論する。第二節では、題識の整理結果に基づき、「学士郎」および関連する呼称を持つ人物の氏族属性を集計・分析し、氏族の背景およびその変遷を考察し、曹氏帰義軍時代の敦煌社会構造の変化について議論する。

第三章「学士郎の行為」では、「学士郎」の「行為」に関する研究を行い、題識に記

載された「読」、「誦」、「書」、「写」に焦点を当てる。仏經題記における經生や書手とは異なり、「学士郎」は文書を「写」だけでなく、「読」、「誦」、「念」、「札」、そして「側書」などの行為も行っていることが確認できる。これは、「学士郎」が敦煌文献の単なる抄写者にとどまらず、同時に使用者、所有者、さらには一部の内容の執筆者である可能性を示している。行為に関する情報から、抄写が写本時代の主要な学習方法ではなく、「学士郎」と敦煌文献の関係が単に学習者と教材の関係にとどまらないことが明らかになる。したがって第一節では、敦煌文献の題識における「読」と「誦」の区別された使用実態に注目し、用語の意味を明確にした上で、三件の『誦経歴』文書を組み合わせて、写本時代の基礎学習段階における「読」と「誦」の目的と方法を論じ、啓蒙教育は主に「読」と「誦」によって行われるという観点を強調する。第二節では、敦煌文献の題識に記載された「書」と「写」の区別された使用実態に焦点を当て、詩文題識における「側書」の意味とその方法を論じ、学士郎題識が文書所有権を示す現象と組み合わせて、写本時代に「書」と「写」が区別される要因を説明する。第三節では、書法の「筆勢」の習得と応用の観点から、習字材料を再考察し、習字材料も題識の一種と見なすべきであるとする。各種題識の内容と形式の特徴を分析し、各種題識が学士郎による「書」の習得と応用に関連しているということを提示する。

第四章「学士郎の役割」に関する考察では、「学士郎」の「所属」に焦点を当て、第一節では、学士郎題識に見られる「寺院」、「坊巷」、「押衙」、「孔目」などの所属情報を整理し、帰義軍時代の職官制度の構造とその変化を明らかにする。張氏帰義軍の職官の地域特性や曹氏帰義軍時期の「兼官帯職」の現象を考慮し、先行研究で「寺学」や「私学」などの教育機関とされている状況を踏まえ、題識材料とともに学士郎呼称が出現することに注目している。これにより、「学士郎」が官府、社司、寺院などにおける「学官兼称」の実務活動に果たす役割を明らかにする。次に第二節では、敦煌文献の社会応用文書である『難月文』を例に、文書の収集と整理を基礎にして、社会応用文書テキスト間の関連性および絹画功德記への転換現象を解明し、文献の書写以外にも学士郎が果たす重要な役割を明らかにする。

付録の『敦煌文献学士郎題識集録』では、写本、造像、絵画など各種文献に見られる「学士郎」および関連する呼称に関する資料を収集し、整理している。『集録』には、呼称に基づく先行整理の概況、題名、写本の状況、本体内容、画像および題識の録文、先行研究の備考情報（個別問題の研究史）、本文で新たに補足する備考情報（研究メモと新発見の課題）を含んでいる。付録部分は先行整理と研究に基づき、画像の照合、修正、および補足を行い、多くの資料と細部を追加し拡充している。1987年および2008年に続く、こうした題識資料の再整理により、旧資料から新たな課題を発見し、多様な内容と視点の研究に資することが期待される。

本研究を踏まえ、敦煌文献における独特な呼称である「学士郎」は、良好な氏族の出

身と優れた筆墨能力を強調するために用いられ、個人および氏族の発展を目指して評価と名誉を積み重ねることを目的とする敦煌社会文化の一側面を反映している。また、敢えて西域の通路であり、緩衝地帯でもある敦煌帰義軍政権の安定と社会の繁栄を維持するための一つの表現と考えられる。この点が、本研究における「学士郎とは何か」に対する提案であり、今後の研究の展開における重要な問題意識でもある。